

ポケットジャーナル



★のじぎくの店総会開く

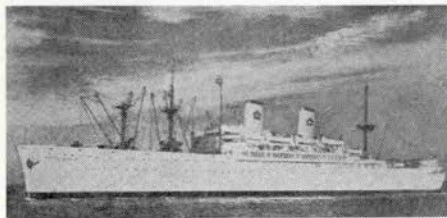
三月二十八日午後一時からオリエンタルホテルで「善意の会のじぎくの店」(高橋利一理事長)第八回総会が開催された。

この会は三十九月六月一日発足、現在正会員六十七名、協賛店百五十名で殆んどが神戸市内の店である。

この日持ち寄られたのじぎくの箱・みどりの箱の義金は十五万八千円余り。のじぎくの箱は四十年六月から設置され、心身障害児のための県立コロニー建設基金の一部とするため、兵庫県社会福祉事業団を通じ、県に寄託しており、現在約四百万円になっている。みどりの箱は四十五年トヨタカローラ兵庫の提唱で始められ、現在までに約四十万円を県に寄託、交通遺児教育基金としている。

★オリエンタルプレジデント号夏の豪華客船の旅

四月は、オロンセイ、ニューボーランド、マルコポ



オリエンタルプレジデント号

ーロ、キャセイ号などに加えて、ロイヤルヴァイキングスター(ノルウェー)エリニス(ギリシャ)など初入港の豪華客船でにぎわったが、オリエンタルシッピングが、このほどA・P・Lのクリープランド号とウィルソン号の二隻を購入、オリエンタルプレジデント、オリエンタルプレスと名も改めてお目見得。五月十二日に、オリエンタルプレジ

デント号が初入港する。

五月十二日は、横浜―香港―基隆―神戸―横浜のコースで、二十四日は、横浜―サイパン―グアム―神戸のコース。香港―神戸三万―一五〇〇円と十一万五千円とフアーストクラスあつかいでAからKまで種類があるのて安い。基隆―神戸一万八九〇〇円から、サイパン―神戸三万―一五〇〇円から、グアム―神戸二万五二〇〇円からと、豪華船の旅を割あい安く行けるので人気呼びそう。六月六日・六月十八日と夏に向って楽しい船旅ができる。お問合せは、オリエンタルシッピング TEL・391・3882

★人形が悲しむとき……

第一回金山平三記念美術賞が松本宏氏の「人形の悲しみ」に決定した。金山平三は兵庫県の生んだ偉大な画家でこの賞は県下の洋画壇では最高の榮譽である。「六甲にヨーロッパのガラクタ類を売っている店があるのですが、ある日そこで首と胴体がバラバラになった日本人形をみつけたのですが、そのときにショックを受けたのが、この絵を描くきっかけとなりました。

何というか、郷愁といったものにひかれたのですね」松本氏のアトリエには当の日本人形が無言のまま無

誕生日 ありがとう 運動

★手をひく

手をひいてやるうと
わたしが 手を出すと
この子も
手を出したが
それは
いつものように
よだれに ぬれていた
それで
その手を いそいで
ひっこめて
ごしごして

じぶんの服でこすって
この子は
うれしげに
わたしの手を にぎった
かわいく
ぬくく

いじらしい手であった
近藤益雄詩集「この子をひきに」

作者は小学校校長を退職し、理想に燃えて精神薄弱児施設を設立、この子らの養育に励まれたが、ついに自ら命を断られた。その後この施設は子息によって今に続けられている。

誕生日のお祝いの中から意識的に百円節約し献金する。各家庭でもつ。このことを手がかりとして、わたしたちすべてが精神薄弱児(者)をあたたかく包む雰囲気を広げると同時に、ひとりひとりのかけがえのない生命について思いをめぐらせ、年に一度の誕生日を有意義にしよう、という運動です。

誕生日ありがとう運動本部

神戸市IFF区御幸通八の九の一
神戸国際会館一階(郵便局の前)
(二五二)八一六一内線316





神戸ポウリングセンター

にも始められる手軽さではあるが、技術的には従来のポウリングより奥深く、全国共通のハンディ制度があるなど、新たな人気をほくしそうである。

★花の女が生き生き

シンプルな美しさと着易さで人気のあるジバンシイの73春・夏コレクションが四月三日オリエンタルホテルで開かれた。パリの粋をみせるこのショウは「花の女性」をテーマに、シルエツトはスリムで流れるよう



★ジバンシイのショー

な軽快なタッチ。あらゆるものにブリーツが使われたり、二色の濃淡の太いふちどりや、幾何学的なブリント、リネンものが多く、色は白とグリーン、強烈なブルーなどがみられ、デザイナ、カットイングの仕立て良さで、本格派の味をたんのうさせてくれた。

★「市民都市の創造」宮崎

神戸市長が講演集を出版
大都市のヒズミに挑戦するユニークな都市政策
学校公園、全世帯アンケータ、コミュニティ・ボンド、環境条例などをつぎつぎに展開してきた市長が環境都市、福祉都市の創造を市民に訴える。三月二〇日、勤草書房より発売。

花時計



★祭りへの参加

神戸まつりも三回目を迎えて、ますます盛り上がりを見せている。各地域が着々と準備を充実させていて頼もしい限りだ。

現代の都市生活の泣きどころといえはなんと、いつでも市民のコミュニケーションの欠落したところ

ろである。

祭りを馬鹿騒ぎだと白眼視するのはたやすいことだ。が、地域社会はそんなことでは成立たない、理解させようというのは難しいことだが、地域行事の無視、無関心さ加減のなかから、人間生活の無視・環境の破壊や公害をまきちらして平気でいられる心理状態がでてる。

地域あつての社会である。大企業も中小企業もどんな商業活動も地域を無

視しては成立たない。

その地域の市民あげての祭りなのである。

日は浅く三回目だがその支えに港のまつりがある。この祭りが賑やかにより盛んになることは神戸がより繁栄することにつながるわけなのである。

あなたも一家総出で、あるいは会社の社員総出で神戸まつりをどう楽しむか作戦をたててください。神戸全域でいろいろな祭りや協賛行事が繰りひろげられているのですから。

(Y)

KOBE POST

★神戸新聞論説委員の竹田洋太郎氏は、四月二十九日神戸新聞を退社、ニューヨークで友人のシマザキ氏の会社で貿易マンとして新しくスタートされ御家族は一月おそく、ともども渡米されました。

★大韓民国領事の李愚庸さんは、四月に本国へ乗船のため旅立たされました。

★作家の藤本義一さんは四月住みなれた大阪から西宮へ転居されました。新住居は、兵庫県西宮市上甲東園二丁目六番20(〒6622) 電(0798) 52・3560

★デザイナターの瀬本唯人さんは四月一日より仕事場を移されました。東京都渋谷区千駄ヶ谷3-16-3メゾン原宿5011(〒151) 電402・1765

★アメリカンフットボールの米田満さんは三月完成した甲子園パーク・マンションの五階に居を定められました。〒662西宮市甲東園三丁目一番四1508電(0798) 52・1502

★英文毎日の神戸駐在主任は、三月一日より木村宗雄さんが着任されました。生田区栄町4ノ3毎日新聞神戸支局電(078) 371

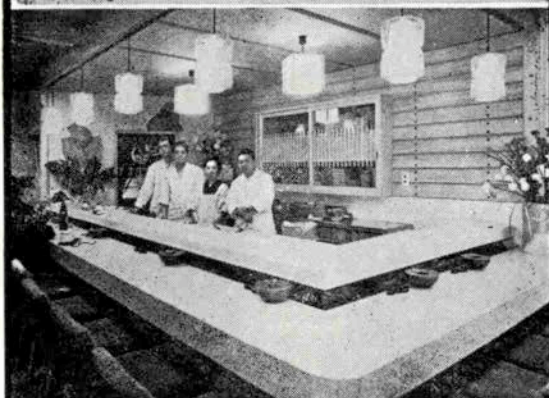
★3220
★デザイナターの藤谷明さんは、仕事場を、普合区磯辺四丁目七ノ六(五階五一六号) 電2511・9436でスタート。

★カメラマンの赤松克麿さんは、五月一日、神戸市兵庫区島上町52アカツカマンション1Fで、スタジオPAKをオープン。独立されました。

★フアッションメーカー「リィー」の飯田守社長夫人が、四月十三日に急逝されました。ご冥福をお祈りいたします。

★田中印刷の営業マン土井龍雄さんが独立。王子美術印刷を開業。灘区灘北通五ノ七ノ三 電801・0011

ゆったりと落ち着いたスペースで
新しい“味”をご賞味ください。



又平の鱈

神戸三宮生田ノ社ノ西
電話・三の宮 (331) 0935



おいしさが
口いっぱい
ひろがる……
本場の味



- 三宮センター街柳筋店
TEL 321-3446・331-0572
- 新開地店
TEL 576-1191
- 平野店 (平野市場内)
TEL 361-0821
- 三宮センター街サンプラザビルB,
TEL 391-3793

オリジナル **L** サイズ

草履新発売

創業明治二十八年

履物の山下

古い老舗に新しいセンス

確実正札 完全冷暖房

静かに品選びの出来る店

神戸三宮センター街 TEL(391)0256



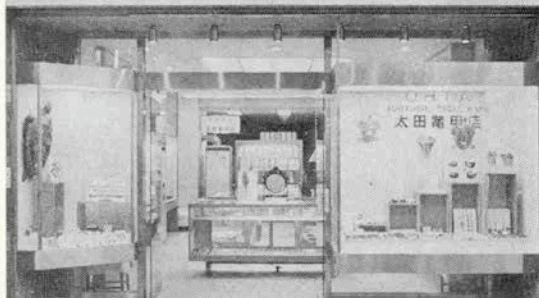
ハイセンスの紳士服で最高のおしゃれを!

三恵洋服店

元町4丁目 TEL(341)7290

GREEN KOBE SHOPPING

太田鼈甲店



べっ甲美術品とアクセサリーの専門店

太田鼈甲店

元町1丁目 TEL(331)6195



Mr. Kent
came to Kobe
流行に左右されない
本来のオシャレ
それがKentです
シックな
スコッチ風の店舗
それがFunakiyaです

Kent shop
ケンキヤ
元町3 TEL(321)0356

高級紳士服専門店
神戸テラー



さんちかメンズタウン TEL (391)0388
生田区北長狭通2(阪急西口) TEL (331)2817・3173

おすし
てんぱら



崇
彌

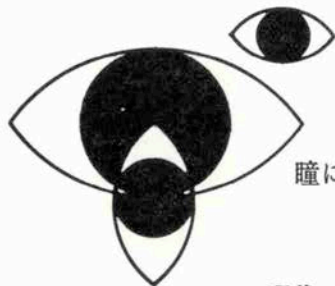


支店 さんちか味ののれん街
TEL (391)5233
(第3水曜日休み)

本店 大丸前・三宮神社東
TEL (331)5772
(毎週水曜日休み)

営業時間
A.M.11.30~P.M.9.00

GREEN KOBE SHOPPING



瞳に美しさを保つ
スポーツに
美容に
現代の科学が生んだ
コンタクトレンズ

日本コンタクトレンズ協会会員
国際コンタクトレンズ研究所

神戸市葺合区御幸通八丁目九ノ一(三宮駅前)
神戸国際会館内 TEL (251)8161・(231)2570

やっぱりうまい
むさしのとんかつ

でんわ・
三宮
ムサシ

321 321 331
— 〇六三四
— 〇六三五

異人館物語 〈10〉

ジェームス山哀歌

小山 牧子

え・石 阪 春 生

「旦那様、幸せはほんのひと時の夢でございました。」
萌えたつ樹木の葉群から吐きだされる春の呼気……。
ふさは、一瞬、老いてゆく身に、あの四十才という年令
でおどろに燃えた、遅い春の訪れの記憶をよみがえらせ
る。

そうだ、ジェームス夫人の死のあと、半生を使いなれ
た一箇の道具、たとえばジェームスのヒゲソリ器とか洗
面台のような存在として甘んじてきたふさに本当の幸せ
が訪ずれたのだ。

シブチンとして定評のある彼が、日本人の召使いに邸
宅を買い与えるといった奇跡が、ふさによって実現した
ジェームス山の山頂近くにあるその邸宅に、老人は例
の骨太いステッキを突き、青年のように若々しい顔で登
ってくる。待つだけが生活のすべてになったふさにとっ
て、その午後の時間がなんと待ちどおしかったことか。

邸宅の南側の窓からは、樹海のむこうに陽光にやわら
ぐ瀬戸の海が見わたせ、ふさはその海に白い三角波がさ
わいでいたり、ある日は、水平線の一角から黒い点のよ
うに姿を現わした巨船が、ゆつくりと目に見えぬ早さで

あらずし 明治時代といえは多くの異国人が神戸に移り住み、西歐
文明を背にして活躍した頃だが、E・W・ジェームスも数少ない相場
師の一人で、兵器売込みでもうけた金で塩屋の山を外国人居住区とし
て開拓していった。そしてジェームスの雇用人の中に、ジェームスか
らひときわかわいがられた中井ふさの姿があった。ふさは第二次大戦
で国外追放となったジェームスの代りに彼の残した財産を守りぬく決
意を固めたが戦争が激化するにつれて彼女は同僚の敵意にかまされ、
深い坐折感を味わわねばならなかった。

戦後、日本に帰ったジェームスは戦争で手のほどこしよりもなく荒
廢したジェームス山の復旧に全精力をそそぎこんだ。そして年老いた
老妻を失ったジェームス老人のそばには妻の代りに彼にびったりと寄
りそうふさの姿があった。

港内に近ずいてき、船の側壁が銀の破片のようにきらき
らと輝いているのを、うっとりとして眺めながら、老人の愛
撫を受けたものであった。

時どき老人は、あまりにも手を広げすぎ、收拾のつか
なくなつた仕事の重荷に困惑し、手負いの獣が洞にかく
れるようにふさの館に登ってくる時がある。そんな時、
ふさは老人を深くいたわりながら、反面である喜びをか
みしめるのだった。——旦那様には、もう本当に私一
人しか頼れる人がいなくなつた。とうとう旦那様は私の
ものになつた。

身分の違い過ぎる異国の男をひそかに愛し続けてきた過ぎた日の屈辱と孤独を、ふさは思っていた。

そんなふさに、老人はたいそうやさしくなる時がある。

「フサさん。私という年老いた時のことが心配の時があるのではないか？」

「はい、旦那様、私には旦那様におつきしする以外になにもございませぬ。旦那様のおそばにいられる間は、幸せでございませぬ……」

「ドン・マインです、フサさん」

「と、申しますと？」

「私いま新しくはじめたゴルフ場と飛行場の発着場を作る事業にたくさんお金が必要です。しかし、この仕事も、もう見通しがたちました。協力者も得られるところまでできました。もう少しの我慢あります。苦しみも少しの間。ね、フサさん、少し待って下さい。老後が安定するだけの資産を、しばらくしてユウの名前にギャンランテイします」

「ま、もったいないことを、旦那様……」

語尾をふるわせて涙ぐむふさがいとしくてか、老人はそんな時、いつにもましてふさに溺れた。

いわゆる下積生活の苦勞をなめてきた四十歳のふさはこの老人の口約束をしっかりと胸にたたみ込んだのであ



る。老人の愛撫を受けながら、この老人の言葉を反芻すると、愛される喜びが更に強まるのだから仕方ないが、人のよい一面をもつふさは、このジェームス老の口約束を文書にして残すべく老人にせまるだけのガメツサに欠けた。

とはいえ、ふさのしあわせな日々に変りがなく、一年はすぐに流れ去った。

昭和二十六年、このふさの幸せはのっぴきならぬ運命の鉄槌によって打ちくだかれた。突然、ジェームスの死がきたのだ。

「ジェームスさんが死にはった年は、花の多い年やった……」

年々めぐってくる同じ春の山路を歩きながら、ふさはつぶやく。

ジェームスという活力にみちた老人の精気を吸いつくそうとして花々が咲きだしたのか、ジェームスが死んだ昭和二十六年の春、薔園は葉の緑が花の下にひしされるほどたくさんの花をつけ、桜は、花の重みで枝が垂れ、いかにも重そうな風情で咲いた。

美しいという表現がそぐわぬ、まるで大地の業のように群れ咲いた花のさまを見て、ジェームス山の山すそに鎮座します不動明王に詣うでにくる界限の老婆たちが話しあう声を、あの年、ふさはたしかに聞いたような気がする。

「今年が、例年のう、えらい花が多うおますな」

「ほんに、花の多い年は、その家にだれど人死にがあるそうで……」

「ひょっとしたら、この身にお迎えがくるんかも知れません……」

「いいや。こない暮らしにくい世の中、早ようお迎えがきてくれたらと思わん日とてないけど、われわれ石くれない命が逝くのに、仏さんもこない仰山な花を飾ってくださいものか」

「それもそうだな……」

そのあと、老婆たちは、しわぶきのように乾いた笑い声をたてたものであったが……。

躑躅が終ると桜、もとに復したジェームス邸に咲いた薔薇も、その時の花は、驚くほどに大輪で数が多かったやがて百日紅がピンクの花をつけ、夏が過ぎると金木犀が匂いたち、山路に萩が咲き乱れる頃には、ふさはもうその年の花の多さにも慣れ、あの老婆たちの不吉な会話を忘れていた。

そして、運命の十一月十二日がきた。ふさは、夜半ジェームス邸の召使いが戸をたたくけたたましい音に目を覚ましたのである。

「中井さん、起きてんか！ 旦那様が急なこっちゃで……」

「なんやってえ?!」
素足のままで土間に降り立ち戸をあけると、冬の予兆を感じさせる十一月の尖がった風と共に、顔を蒼白くこわばらせた召使いが立っている。

「お医者、呼ぶ間もあらしまへんねん」

「大勢の人がついとってじゃらじゃらしたことがあるもんか」

男のような激しい口調で喚きたて、身じまいもそこそこに、ふさは山道を走り降りた。

——旦那様が死なはった?! そんな馬鹿なことがあるもんか。あんな頑強な人が、急に死んでしまいはるなんて、あほらしいことをいうたらあかん。

ふさは、運命の不意うちを信じかね、心であがらい続けた。が、足は、若い者でさえおよびもつかぬ速さで駆け続けるのである。

急を知らせた召使いが、ふさの気迫に圧倒されながらふさのあとについて走り息を切らせて叫ぶ。

「心臓マヒですねんと。しんどいからゆうて早ようおやすみになりはりましたん。それが一寸間して呼びリンなりましたよって行ってみましたら、もう目えが白うひっくり返つとって……」

リアルな話しぶりである。

E・W・ジェームス、英帝国勳章受章者、享年六十三歳。

ふさが館に駆けつけた時、ジェームス老人の屍は、すでに白い花々にかこまれ、死者の部屋には、ジェームスに親交の篤かった異国人がためていた。その中心で采配をふるっているのが、カメロン商会の時代から彼の片腕となつて働いたH・S・ウイリアムスと彼の妻である。

髪ふり乱したさまでかけつけたふさはそこで思いもかけぬ壁につきあたった。

愛するジェームスの周囲には、ふさとは目の色も肌の色も違う異国人が居並び、悲しみにぬれ、慟哭の声をあげようとすふさを冷たく拒んでいた。

「一目、旦那様とお別れを……」

と願う、ふさを、ジェームスの屍のそばに近づけなかつたのでは決してない。が、彼等異国人は、館に置かれた古い帽子かけを見るのと同じ無関心さきわまりない視線でふさを迎えることによつて、ふさをこの館の召使としての立場から一歩も出させない決意を意志表示したのだ。思えば、夜道をかけてふさにジェームス老人の死を知らせた召使の行為も純粹にふさへの憐憫の情にかられたことだったのか。それでなければ、H・S・ウイリアムスがジェームスの周囲をかためる前に、まずふさが駆けつけていたはずとふさは思うのである。

このふさに無関心な碧い目の壁を前にして、ふさが、ジェームスの冷えきり硬直した手をとって涙にくれるといった行為は許されない。

ふさは、慟哭の声をのみ込み、長い間苦楽を共にした旦那様との最後の別れを果した。勿論、終生、忠実に仕えた召使いとしてである。

その夜、召使いたちは、目ざめたまま朝を待つていたカナダにいるジェームスの娘たちへの連絡はすでにすませ、やがて、おとずれる朝、彼等は、この希代の事業家をとむらうための仕事に忙殺されることだろう。

オール関西

〈5月号予告〉

グラビア「女の四季」小山明子
グラビア 万葉記(2)文/犬養孝
「山の辺の道」カメラ/西岡伸太
グラビア 私の散歩道 /龍村
平蔵、牛尾吉朗、生田花朝女
グラビア 朝比奈隆音楽生活40周年
連載対談②⑤ 朝比奈隆 ×吉村一夫
オセアニア紀行④
ニュージーランド(上)木崎国嘉

現代の企業 「株式会社堀場製作

所」堀場雅夫

商売の最前線 株式会社 ファミ
リア 坂野通夫

特集 オーストラリアへの旅

特集 阪急三番街

特集 神戸祭り

織田作之助伝⑮ 「ジュリアン・
ソレルは僕や」 大谷晃一

播州歴史散歩③

「三木(下)」黒部亨

エッセイ /筒井康隆

創作 「競馬酔狂連」⑧ 新橋遊吉

月刊オール関西編集部

大阪市北区梅ヶ枝町80 梅新東ビル7F

TEL 06-364-2434~7(代)

死者のいる館でのつかの間の閑暇の時、同じように館に使われていた同僚たちが、ふさに話しかける。
「急なことで気を落しはったやろけど、元気出しなされや……」

この慰めの言葉もふさは素直に受取れない。ジェームスの生前、雇主の信頼と好意を独占していたことで、ふさはなんとしばしば彼等の憎悪の対象にされていたことだろう。彼等は、いま、ふさの悲しみのさまを見て痛快がりこそすれ、共に泣いてなどくれはしないのだ。心を固くこわばらせながら、ふさはジェームス老人と共に持ったつかの間の楽しかった日々を思い返していたと、背後で、ふさははかかるような低いささやき声が交わされはじめたのである。

「あした、弁護士さんが呼ばれて、ジェームスさんの遺言状が開かれるんやと……」

「へえ……。中井さん、気もめることやな」

「ふん、どうも遺言状には、中井ふさのなの字も入っていないらしいでえ……」

「そんなアホな……」

「そうかて、さっき紅茶のお代わり持って入ったら、ウイリアムさんがえらいはりきって、中井さんのこという

てはった。イツ、ネバー、ハッペンやって。うろ聞きやけど、ジェームスの片腕やったウイリアムさんは、遺産の相続権のことでもいろいろ相談受けて、遺言に名前を書き込んだ人のこと、あの人にだけは前もって言うてあるらしいでえ」

低くささやかであつたその対話をふさは聞いたかどうか。が、もし聞いたとしても、ふさは自分の耳をうたぐったことだろう。あれほどジェームス老人はたしかな約束をしてくれていたではないか。もし召使いたちの噂が事実だったとしたら、それはジェームス老人の生前からふさを嫌っていたウイリアムの作為であると、彼女は思ったことだろう。

しかし、その翌日、開かれた遺言状には、召使いたちが噂した通り、中井ふさへの贈与に関する一行の記載もなかった。己れを不死身と信じているところがある、むこういきの強いジェームスのこと、遺言状を書きかえるひまもなしに突然の死がおそいかかったゆえのことか。それとも、ジェームスもやはり生えぬきのイギリス人、異国の女を孤独のなぐさめにはしたけれど、遺産を残してやろうとするやさしい心など毛頭なかったのか。それは今もって残るナゾである。(つづく)

曲線ハイウェイ

武田 繁 太郎
え・横 塚 繁

宮内温泉みやうちの温泉という、ひなびたその温泉宿は、村役場のわきを流れている溪流の四キロほど上流に、ほつつりと一軒だけあった。

溪流は泊川と呼ばれていたが、岩の群れをぬって流れ

〔あらすじ〕 東名高速サービスエリアで多木洋介は神戸の女性宇津康子と知合い、逢瀬を重ねるうちに康子にひかれていった。ある日友人岡本和彦と共に神戸へきた多木は康子に会えず、彼女の面影に似た辰野英子を紹介され、六甲山へドライブに出かけた。ロマンティックな情景に誘われて英子を抱きしめた多木の胸に、初めて感じるいとおしさがつり、その夜二人は愛しあって別れた。

そんな時突如として康子から電話があり、多木と康子は二人の愛を確かめあった。翌朝、風のように去っていった康子を追い神戸にきた筈の多木は、岡本の早谷み込みと神戸の雰囲気の中で英子を捜している自分に気付いた。英子をみつけた多木は淡路島へのドライブに出かけたが、その帰りに中年の男と寄りそって歩いている康子を目撃した。その衝撃を負って帰京した多木のもとに康子からの屈託のない電話が入った。十日間の休暇をえた多木は、北海道へのドライブに康子と出かけ、札幌から海岸沿いの園道を通り、さいはての村島牧に向った。その村は、難病にかかった象の花子が温泉で聞病していることで、かつて新聞に報道されたことがあった。

ている水は、一点の濁りもみあたらずに、気持ちよく透きとおっていた。こういう清流には、おそらくアユやヤマメなどが群泳しているにちがひなかった。

宮内温泉は、溪流沿いの林道からすこし奥まった原生林のなかにあった。そのすぐまえに、象の花子が湯治しているプレファブの建物がみえた。

二人は、不意の訪れだったが、泊り客も少ないらしく、すぐ、二階の八帖の客室におおされた。

「東京からクルマでお越しでしたか。それは、それは、お疲れでしたらう」

四十がらみのおかみは、いかにも農家の主婦然とした

感じだったが、この宿も、農家と兼業だったのかも知れなかった。

島牧には、宮内温泉のほかに、千走温泉、小金井沢温泉などという温泉もあるという。こは、那須火山系に属しているので、沢のあるところなら、だいたい、どこを掘っても、温泉が湧きだしてくるだろうというのである。

「いまも、村で、千走川の河口のそばをボーリングしていますが、途中まで掘って、もう五、六十度の温泉がでていますよ」

おかみは、村じゅう温泉だらけだと、笑いだしていた。海は魚の宝庫、山は山菜の宝庫、それに、温泉群と、こは、三拍子そろった土地柄だった。

「なんだか、まるでこの世の極楽みたいな秘境ね。景色は絶好だし」

康子は目をまるくしたが、
「極楽といえ、この山の上は、動物たちの天国なんですよ」

「じゃ、北海道名物の熊もいますの？」

「ええ、ええ。いますよ。この村の狩場山という山は、道内で二番目に高い山ですけど、ここには、熊が何百頭も棲んでいるということですよ」

「この辺まででてきますの？」

「いいえ。熊はでてきませんけど、キツネやタヌキなら、国道あたりまでも、しょっちゅうでてきますよ」

なるほど、いかにもこは秘境の村だといえた。

ひと休みしたところで、二人は、象の花子をたずねることにした。

宿の下駄を借りて、宿の女関さきにある花子の家にかけていった。入口をはいると、すぐ広い土間になっていて、花子は、寝わたりのなかに、その巨体をよこたえていた。

土間の半分は、小さなプールのような温泉場になっていて、ホースでひいた温泉がこんこんと湧きだして

た。さすがに象のはいる浴場は、象なみのキングサイズだった。

花子の世話をしているS氏に来意を告げると、S氏は、心よく二人を迎えてくれた。

「花子もだいぶ元気になりましたね。もうひと息なんですよ」

S氏は、横むきにごろんとよこたわっている花子の長い鼻を撫でながら言った。

「まあ。かわいい目をしてますわね」

康子は、こわごわ花子の大きな顔をのぞきこんだが、花子は、きれいに澄んだ小さな目で、鼻を撫でてくれる主人の顔をじっとみあげていた。

S氏は、花子と五年以上も親娘のように、文字どおり寝食をともにしてきていた。五年前は、花子は、まだ六歳の仔象だったが、いまではそろそろ娘ざかりを迎える十一歳の成象になっていた。

さいしょ、S氏は、難病のクル病にかかって、処置に困った花子を、処分するように頼まれたのだった。S氏は、業界でもきこえた剥製師で、熊だけでも、もう五千頭も解剖して、標本にしているベテランである。

だが、S氏は、花子のあわれな姿をみて、殺すに忍びなくなった。直せるものなら、なんとかしてこの難病から花子を救ってやりたいと思うようになった。

S氏は、若いころから、道内はもとより、樺太、千島の山々に鳥や獣をもとめて暮らしてきた。動物の生態については、なまじな動物学者よりも通曉していた。熱帯性動物の象ははじめてだが、S氏は、花子の飼育にも自信を持っていた。

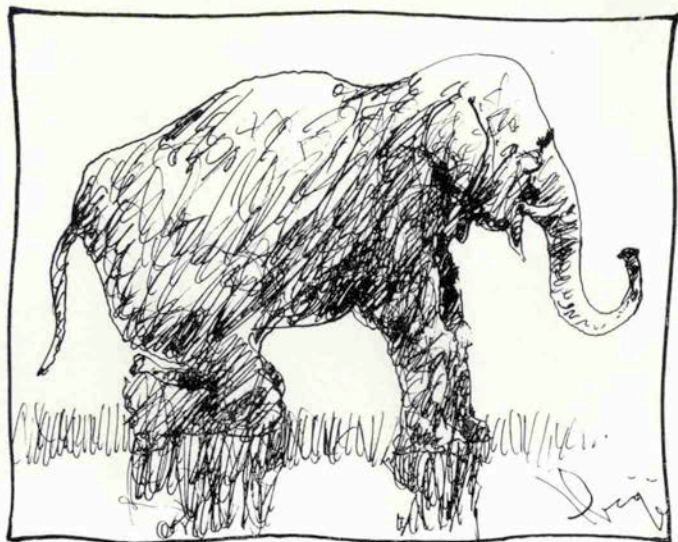
この日から、S氏と花子と一心同体になった闘病生活がはじまった。さいしょは、札幌郊外の真駒内の自宅で、花子の看病をつづけていたが、温泉療法がいいとわかったので、長万部の奥にある二股温泉に引越し、さらに、新しい温泉場をえらんで、二年ほどまえから、この島牧に居をさだめていた。

健康な象ならともかく、北海道のような寒冷な土地で、病弱な象を飼育するなどということは、動物学界の常識からいって、不可能だとされていた。事実、いままで世界中にもその例をみなかった。

動物学者たちは、在野の一割製師のこの試みを黙殺した。学者たちにかぎらず、世間の目も冷淡であった。だれひとり、援助の手をさしのべようとするものもいなかった。

花子は、よく食べる。イモ、リンゴ、パンなど、一日に二十五キロ、生卵など一回に五十個も平らげる。食費だけでも、月に十五万円かかった。S氏は、札幌で割製店を経営していたが、その収入をつぎこんで、花子の看病に専念した。

幸い、二股温泉時代から、札幌で建築会社を経営して



いるK氏夫妻が、花子の大のファンになり、二股から島牧に移ると、K氏は、百万円の私財を投じて花子の家を建て、地元青年を雇って、S氏の助手にあたらせた。

こうした人々の善意と愛情が花子の身に奇蹟を生んだのである。動物学界の定説はうち砕かれた。花子は六年間も生きつづけ、しかも、めきめき健康をとり戻していった。これは、過去の動物実験の専門家たちのだれもがなしえなかった、世界の新記録であった。花子は、一日生きのびるたびに、みずからの生命力で、世界記録を更新していた。

花子は、タイの象である。S氏の悲願は、花子が歩行できるようにしたら、生まれ故郷のタイに彼女をかえしてやることだった。「動物を自然に還してやるのが、動物にたいする人間の最上の愛情なのです。花子ももう年ごろです。一日も早く、タイのジャングルの仲間たちの群れにかえしてやり、いい恋人を持たせてやりたい。そして、かわいい赤ちゃんを生ませてやりたい。それが、いまのわたしの願いなんです」

と、S氏は熱をこめて語る。もう六十をすぎているというが、S氏は、髪もくろぐろとして、全身に若々しい情熱がみなぎっていた。山歩きできたえた身体も、頑強そのものの感じだった。

花子の寝ている上には、鉄柱が長く戸外までのびて、ウインチがとりつけてあった。

「さあ。花子。立ってみよう」

S氏は、大きな花子の尻にムチをあてた。助手の青年が、花子の腹に巻いた綱をウインチに結びつけ、チェーンを巻きだした。


「花子！ 立って！」

S氏が舌を鳴らしながら呼びかけると、花子は、横たおしになっていた巨体を、じわじわと腹這いにさせた。

「さあ。がんばって！」

花子は、巻きあげられていくウインチの助けをかりながら、クル病でまがった肢にちからをこめ、けんめいに

〈神戸の催し物 5月ご案内〉

- 〈音楽〉
- ★5月6日 なおみりサイタル
あき (日) ①P.M.2:00 ②P.M.5:00開演
民音 会員制 ¥1,000 神戸国際会館
喝采 四つのわがい/劇場他
- ★立川 清登りサイタル——ヨーロッパ歌の親善使節
神戸放送児童合唱団を送る夕べ
5月15日(火) P.M.5:50~9:00
¥1,000 神戸国際会館
- ★岸 洋子リサイタル
5月16日(水) P.M.5:30~9:00
神戸労音 S¥2,800 A¥2,500 B¥2,000
C¥1,500 神戸国際会館
- ★チェリッシュ・青い三角定規フォークコンサート
5月18日(金) P.M.5:30~9:00
神戸文連 A¥1,600 B¥1,400 神戸国際会館
- ★ポップス・イン・コーベ
5月19日(土) ①P.M.2:00~4:00
②P.M.5:00~7:00 神戸国際会館
西郷輝彦 にしきのあきら、今陽子
A¥2,000 B¥1,500 C¥1,000
- ★ツトム・ヤマシタ打楽器リサイタル
5月25日(金) P.M.7:00~9:00
シンズズ(武満作曲)/打楽器とテープのための“旋
転”(石井真木)/マスクス(ツトム・ヤマシタ)
民音 会員制 ¥900 神戸国際会館
- ★ジャック・ルーシェ・トリオ
5月26日(土) P.M.5:30~9:00
〈メンバー〉ピアノ/ジャック・ルーシェ ベース/ピエ
ール・ミシュロ ドラムス/クリスチャン・ギャロ
〈曲目〉イタリヤ協奏曲“主上の望みの喜びは”/フーガ
No.5/トッカータ・二返調他
民音 会員制 ¥1,100 神戸国際会館
- 〈演劇〉
- ★滝の白糸
5月8日(火) ①P.M.1:00~4:00
②P.M.6:00~9:00 神戸国際会館
原作/泉鏡花 演出/マキ/雅弥 役付/花柳芳次郎
構成/山本紫朗 出演/朝丘雪路、津川雅彦他
民音 会員制 ¥1,100
- ★影
5月21(月) 22(火) 23(水) P.M.6:15~9:00
神戸国際会館 神戸労音 会員券
5月24日(木) P.M.6:15~9:00 芦屋ルナホール
劇団民芸公演 作/E・シヴァルト 演出/宇野重吉
出演/清水将夫、山内明、坂口美奈子、南風洋子他
- ★真夏の夜の夢
5月24日(木) 
P.M.6:00~9:00
英国ロイヤル・シェ
クスピア劇団
演出/ビーター・ブル
ック 美術/サリー・
ジュエイク 音楽/
リチャード・ピースリ
ー A¥3,500 B¥3,000
C¥2,500 D¥1,800
E¥1,000 神戸国際会館 真夏の夜の夢
- 〈その他〉
- ★花柳流三ツ桜会
5月12(土) 13(日) A.M.10:30~P.M.8:30
神戸国際会館 花柳芳一、芳恵一子
- ★仁鶴インコウベ
5月31日(木) ①P.M.2:00~4:00 ②P.M.6:00~8
:00 神戸国際会館 ゲスト/カフス・ポタン、ザ・パンダ
前売日 S¥900 A¥700 B¥600
当日 S¥1,200 A¥1,000 B¥900

「調子のいい日は、このまま、戸外までもう何メートルも、しっかりと足どりで歩いていくんですよ。もうひと息なんです。あと半年も訓練すれば、花子は、この鳥牧の野や山を悠々と闊歩するようになりますよ」

S氏は、自信にみちた声で言った。

こうした花子の必死に生きようとするけなげな姿が、新聞やテレビを通じて紹介されると、全国の身体障害児やろうあ者たちに、深い感動を与えた。全国の子供たちから、激励や見舞いの便りが送られ、各地で「花子を励ます会」も結成された。花子をタイにかえずことについ

ては、タイ国政府も大賛成で、船で日本まで迎えにくるという。S氏は、花子をタイまで送っていったうえで、二代目花子の仔象をもらう約束をとりつけていた。この仔象を、日本の子供たちとともに暮らせ、成象になったらふたたびタイのジャングルにかえしてやり、また、仔象をもらってくる計画だった。

だが、そのまえに、S氏に残された仕事があった。いよいよ花子がタイに帰れる身体になったら、S氏はトラックに乗せ、全国の学校や施設をまわって、花子を励ましてくれた子供たちに、元気になった花子の姿をみてもらいたいということだった。

多木も康子も、思わず拍手を送っていた。

「調子のいい日は、このまま、戸外までもう何メートルも、しっかりと足どりで歩いていくんですよ。もうひと息なんです。あと半年も訓練すれば、花子は、この鳥牧の野や山を悠々と闊歩するようになりますよ」

S氏は、自信にみちた声で言った。

こうした花子の必死に生きようとするけなげな姿が、新聞やテレビを通じて紹介されると、全国の身体障害児やろうあ者たちに、深い感動を与えた。全国の子供たちから、激励や見舞いの便りが送られ、各地で「花子を励ます会」も結成された。花子をタイにかえずことについ

「よし、」

S氏の賞讃の声に、花子は、そうして立ちあがれたことがいかにもうれしそうに、長い鼻を天井にかけて、高々とふりあげていた。

多木も康子も、思わず拍手を送っていた。

「調子のいい日は、このまま、戸外までもう何メートルも、しっかりと足どりで歩いていくんですよ。もうひと息なんです。あと半年も訓練すれば、花子は、この鳥牧の野や山を悠々と闊歩するようになりますよ」

S氏は、自信にみちた声で言った。

こうした花子の必死に生きようとするけなげな姿が、新聞やテレビを通じて紹介されると、全国の身体障害児やろうあ者たちに、深い感動を与えた。全国の子供たちから、激励や見舞いの便りが送られ、各地で「花子を励ます会」も結成された。花子をタイにかえずことについ

その日、目がかがやかせて語った。

「そのときは、わたしは、トラックに寝袋と即席ラimerでも積みこみ、花子と二人で野宿でもしながら、お礼の旅をつづけるつもりですよ」

その日、目がかがやかせて語った。

「そのときは、わたしは、トラックに寝袋と即席ラimerでも積みこみ、花子と二人で野宿でもしながら、お礼の旅をつづけるつもりですよ」

その日、目がかがやかせて語った。

「そのときは、わたしは、トラックに寝袋と即席ラimerでも積みこみ、花子と二人で野宿でもしながら、お礼の旅をつづけるつもりですよ」

(つづく)

